

「腫瘍マーカー臨床マニュアル」

大倉 久直・石井 勝・高橋 豊
有吉 寛・加藤 紘・長村 義之
栗山 学 著
伊藤 仁・永井 利正 執筆協力

国立がんセンター中央病院・院長

垣 添 忠 生

腫瘍マーカーという言葉を知ると、医学に携わる多くの人たちの頭には、“がんの早期診断”、“治療のモニタリング”“測定の組み合わせと間隔”“保険診療上の制約”“遺伝子産物などの新しいマーカー”といった事柄が浮かんでくるはずである。あるいは、Prostate Specific Antigen (PSA) の導入以来、前立腺がんの早期診断、治療モニタリングに果たす絶大な意義から世界中で汎用されている事実にも思いをいたす方もあるだろう。1つの有効な腫瘍マーカーの導入が、疾患の診断、治療体系を一変させたよい例である。今、早期診断に最も難渋している膵がんも、新しい有効な腫瘍マーカーが開発されれば事情は一変するだろう。既にその画像診断の手法はかなり進歩しているのだから、“そのステップは小さくとも、人類にとっては great leap”と目面上でアームストロング氏が吐いた言葉は、そのまま腫瘍マーカーにも当てはまる。

本書は「マニュアル」と題されているように、見開き 2 頁から 3 頁の簡

潔な記述によって、臨床上重要な腫瘍マーカーの選択、その利用法、疾患別の項目の選択と組み合わせ、適正な検査間隔、偽陽性、偽陰性などを含めたデータの読み方、治療経過中の測定値変動の意義、保険診療上の注意などが網羅されている。

通読する機会のある読者には、「腫瘍マーカーの歴史」の項は理解を深めるうえでも有用である。Bence Jones 蛋白の発見→20 世紀前半のホルモン→1963 年 AFP の登場→1979 年単クローン抗体による糖鎖抗原 CA19-9 の発見→1990 年代のがん関連遺伝子などの新しい腫瘍マーカー開発、は大きな流れをつかむうえで理解を助けることになる。

腫瘍マーカーによる化学療法の効果判定は新しい課題である。がん組織の多様性のため質的・量的なマーカー産生の不安定性もあり、化学療法効果の判定基準作成になかなか意見の一致をみない場面もある。他方、胚細胞腫瘍の場合には AFP、 β -HCG などの腫瘍マーカーの変動は、化学療法の内容や回数、手術の

必要性やタイミングの決定などに必須の手段ともなっている。こうした問題もよく取り上げられている。

腫瘍マーカーを保険診療で使ううえで、確固たるエビデンスに基づく健康保険適用や、悪性腫瘍特異物質治療管理料をがん治療の現場に合わせて柔軟に運用することなど、解決すべき問題点も、利用する側の科学的理解に基づいた適正使用なども適確に触れられている。

巻末に、主な臓器がんでの腫瘍マーカーの病期別陽性率、臓器別・目的別の腫瘍マーカーの組み合わせが表にまとめられている。少し知識が不確かな場合などに参照するのに大変便利である。

本書は、まさしく臨床の現場で腫瘍マーカーを使うすべての医療者にとって有用なマニュアルとして推奨できる。

● B5 頁 198 図 40 写真 1
カラー写真 14 表 91 1999
定価(本体 6,000 円+税) 円 400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)